

小児腎不全の治療状況 (第2報)

小児慢性腎疾患の予防・管理に関する研究 慢性腎炎・腎不全の疫学に関する研究

鳴海福星

一施設における小児腎不全の治療状況について検討した。透析療法は年長児のみならず乳児にも行われるようになり、さらに普及するものと思われる。しかし腎移植に関しては、死体腎提供者が少なく、両親への負担は軽減しておらず、今後の重要な課題となる。

慢性腎不全, 透析療法, 腎移植

研究方法

小児慢性腎不全の治療状況を検討する目的で、東京女子医大腎センター小児科で治療・管理した15才以下の76症例を対象として、(1)治療経過、(2)透析療法導入時年齢、(3)原疾患発見時の主訴とその頻度、(4)原疾患、(5)腎移植までの期間、(6)未腎移植児の治療期間および過去2年間での導入者数と腎移植数について調査した。

結果

(1)慢性腎不全児の経過(図1)

76例のうち1例を除きHDないしCAPDを行った。死亡数はHD群で8例、CAPD群で4例、移植群で1例であった。CAPD群8例のうち2例は腹膜炎後遺症のため、HDへ変更した。

(2)透析療法導入時年齢(図2)

男女間に差はなく、10才以降に導入者が多いが、乳児期の導入者が4例みられた。

(3)原疾患発見時の主訴とその頻度(図3)

浮腫と集団検尿での尿異常が約60%を占めていたが、顔色不良、低身長、多尿といった慢性腎不全の症状を認めながら尿に異常がないことで放置されていた症例もみられた。

(4)慢性腎不全児の原疾患(表1)

腎炎例が多く特に8才以降に著明であった。先天性あるいは遺伝性疾患は各年齢に分散していたが、両側の膀胱尿管逆流症が大多数を占める泌尿器科的疾患による透析導入例は乳幼児期には少ないようであった。

(5)腎移植までの期間(図4)

透析療法導入2年以内の腎移植者数が多く、それ以後は漸減しており、2年前の傾向とは差がみられなかった。

(6)未腎移植児の治療期間(図5)

10年未満が多いが、15年を越える症例もみられた。2年前と比較するとピークが2年年分だけ右へ移動した型になっていた。

(7)2年間での推移

1985年1月より1987年12月までの新規導入者は8例、腎移植者は12例、透析再導入者は4例であり、腎移植者はすべて生体腎移植例であった。

考察

2年前および今回の調査を通して検討してみたが、本邦での年間約5000人の透析患者増加数と比較して当施設の2年間の導入者数は減少している印象があり、それは小児透析

春日部秀和病院 小児科

Fukusei Narumi

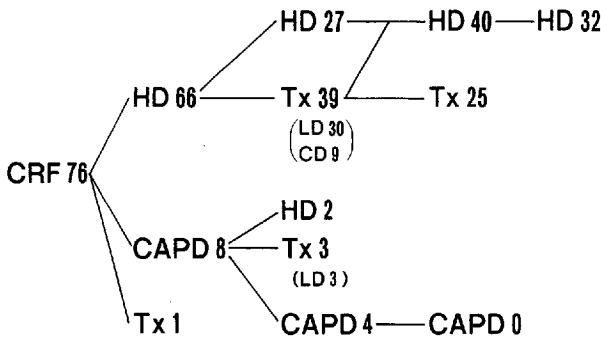
Kasukabe Shuwa Hospital, Pediatrics

療法の普及と集団検尿による早期発見・管理の成果によるものと思われる。

一方、腎移植症例は年々増加してはいるが、生体腎移植例が多く、特に2年間での移植症例はすべて生体腎移植であり、そのために透析期間が長びく症例の増加傾向がみられている。

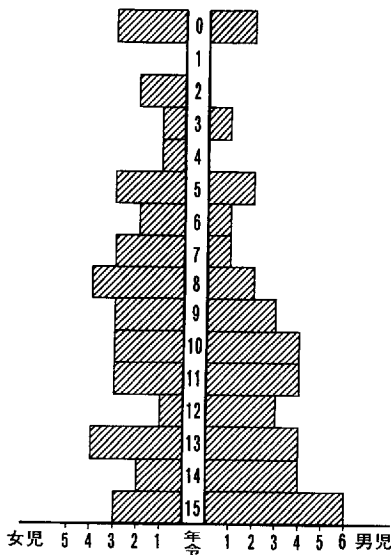
血液型不適合や抗リンパ球抗体陽性のために生体腎移植が行えない症例も多く、また移植腎機能喪失による再透析導入例もみられることより、死体腎移植の一層の普及が望まれ、今後の重要な課題であると考えられた。

慢性腎不全児の経過



(図1)

透析療法導入時年齢 (75例)



(図2)

原疾患発見時の主訴とその頻度

	(CRF 76例)	%
1. 浮腫	28	37
2. 集団検尿での尿異常	30	39
3. 顔色不良	13	17
4. 低身長	6	8
5. 紫斑・腹痛・関節痛	6	8
6. 生下時よりの異常	6	8
7. 多尿	3	4
8. 発熱	3	4
9. その他	5	7

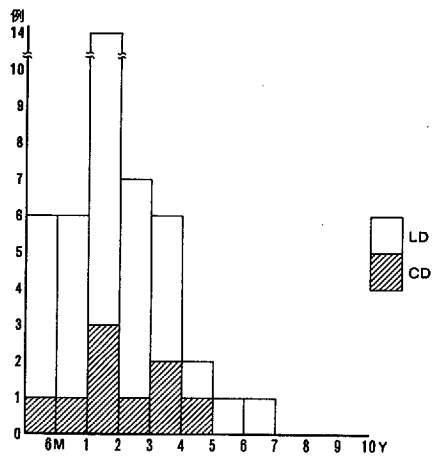
(図3)

慢性腎不全児の原疾患 (76例)

導入時年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
腎炎	M					1			1	4	1	1	3	1	3	
	F		1			1		1	3	1	1	3		3		4
先天性	M	1			1	2	1			1			1		1	1
	F	3		1	1	1				1	1	1		1		
全身性疾患	M									1			1		1	
	F				1									1	1	
泌尿器科的疾患	M							1	1			2			1	
	F						1		1							
不明	M								1		1					1
	F						1	1	1		1				1	

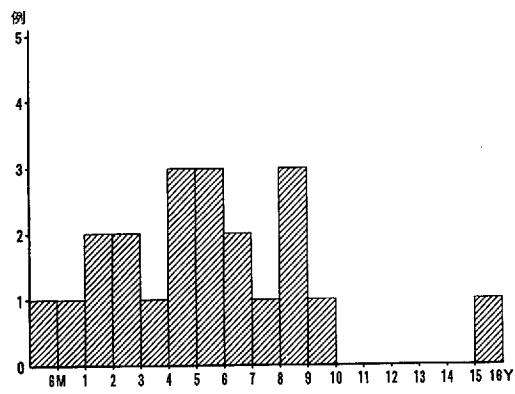
(表1)

43例の腎移植までの期間
(LD34, CD9)



(図 4)

未腎移植児23例の治療期間



(図 5)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



一施設における小児腎不全の治療状況について検討した。透析療法は年長児のみならず乳児にも行われるようになり、さらに普及するものと思われる。しかし腎移植に関しては、死体腎提供者が少なく、両親への負担は軽減しておらず、今後の重要な課題となろう。